

社会へのかかわり方を選択・判断できる子どもの育成 －宮崎大学教育学部3附属学校園の教育目標「かかわる力」を具現化した 小学校社会科授業の報告－

永倉泰治*・緒方宏文*・藤本将人**

Fostering Children who can Select and Judge Society's Involvement : Report of Elementary School Social Studies Class in order to Foster Each Child's Abilities to Relate to Others and Things

Yasuharu NAGAKURA, Hirofumi OGATA, Masato FUJIMOTO

1.はじめに－本報告の目的と背景－

本稿は、「かかわる力」を育成する授業実践の特質を教科の学習, 特に小学校社会科に焦点化して報告することを目的とする。筆者たちがこのような研究を推進した背景には、『宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要』第24号, 2016年に掲載された, 以下に示す5つの論稿の存在がある。

- (1) 安藤真二, 鶴戸周成, 瀬戸山由香里, 河原国男
「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質(その1)－宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組①「かかわる力」の目標系統表とその成立経緯を中心に－
pp.123-138.
- (2) 安藤真二, 鶴戸周成, 福島裕子, 河原国男
「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質(その2)－宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組②主たる目標事項とする活動において－ pp.139-147.
- (3) 安藤真二, 鶴戸周成, 福島裕子, 河原国男
「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質(その3)－宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組③“附属ならではの”特徴的な活動において－ pp.149-160.
- (4) 安藤真二, 鶴戸周成, 河原国男
「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質(その4)－宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組④「交流及び共同学習」の実践－ pp.161-172.
- (5) 安藤真二, 鶴戸周成, 福島裕子, 河原国男
「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質(その5)－宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組⑤「好きな遊び」(幼稚園)・各教科(小・中学校)・教育実習に関する基盤的な実践－ pp.161-172.

*宮崎大学教育学部附属小学校 **宮崎大学教育学部

これらの論稿では、宮崎大学教育学部附属幼稚園、附属小学校、附属中学校（以下、3附属学校園）に通う幼児、児童、生徒に系統的かつ持続的に「かかわる力」を育成しようとした取組が分析・紹介されており、さらに分析の結果に基づいてそれぞれの取組の特質が考察されている。

論稿(1)においては、考察の手始めとして「かかわる力」の目標系統表が開発されている。平成14年度から3年間、文部科学省研究開発学校として実施された3附属学校園を一貫するカリキュラム（「もくせいプラン」）が分析され、3附属学校園が基盤としている考えには、OECDのキーコンピテンシーの要素が含まれていることが明らかにされている。このことに基づき、3附属学校園を一貫する「かかわる力」は教科横断的な基礎的・汎用的な資質・能力として設定されることが適切と判断されたこと、さらに「かかわる力」は「傾聴力・発信力」「状況把握力」「課題設定力」「方法選択力」「課題遂行力」の5つの能力として整理することが適切であることが述べられている。

論稿(2)においては、「かかわる力」が明確に目標事項として設定された3附属学校園の具体的な教育活動が考察されている。附属幼稚園のコミュニケーションスキル活動、附属小学校の生活科単元、附属中学校の生徒総会、宿泊研修の実践が取り上げられ、3附属学校園においては、幼・小・中の段階を経て「かかわる力」が発展的に育まれていることが明らかにされている。

論稿(3)においては、論稿(2)と同じ方法で「附属ならではの」といえる特徴的な教育活動が考察されている。附属幼稚園のわらべうた遊び、附属小学校の平和学習、附属中学校の合唱コンクールの実践が取り上げられ、「課題設定力」が共通して育まれていること、毎年の積み重ねによって「かかわる力」の諸能力が質的に高まっていることが明らかにされている。

論稿(4)においても、論稿(2)(3)と同じ方法で、「交流及び共同学習」について考察されている。「交流及び共同学習」は、障がいのある子どもと障がいのない子どもがともに活動することを目的とした学習であると定義されている。附属小学校では特別支援学級で実施された生活単元学習が取り上げられ、特に「課題遂行力」が伸長したこと、附属中学校の3学年交流・昼食交流・七夕交流では、「傾聴力・発信力」や「状況把握力」の育成に効果があったことが明らかにされている。

論稿(5)においては、3附属学校園における日常的かつ基盤的な実践が考察されている。附属幼稚園の「好きな遊び」、附属小中学校の各教科（小：音楽、図画工作、中：社会、数学）の実践、そして大学生に対する教育実習指導が取り上げられ、「好きな遊び」、各教科の実践においては「かかわる力」の諸能力が力強く持続的に、かつ広範囲に育まれたことが明らかにされている。また教育実習指導においては、実習生が生徒を育てるだけでなく、生徒が実習生を育てていることが示され、「かかわる力」が教育実習指導においても児童生徒により卓越した力として発揮されたことが示された。

このように論稿(1)～(5)を通して、宮崎大学教育学部3附属学校園では、幼小中を一貫する教育目標として「かかわる力」を設定し、日々の取組でその具現化に努めていることが明らかとなった。論考で示された教育実践は、3附属学校園としての一貫性の論理を担保する事実であり、その存在が公にされたことは大変意義深い。しかし、示された事実は3附属学校園で実施された全授業の内の一部であり、これからもさらに実践の蓄積が公にされる必要があるだろう。本稿では、これまで示されてこなかった小学校の社会科を対象に、「かかわる力」を育てる

授業とその内実を報告することとしたい。

2. 研究テーマの設定

2.1 研究テーマ

「社会へのかかわり方を選択・判断できる子どもの育成」

2.2 研究テーマ設定の理由

選挙の際に自分の1票を誰に投じるか。立候補した人が掲げる公約と自分の置かれている立場を比較検討し、できれば自分の生活にとって良い結果をもたらされる政策を実現してくれる候補者にその1票を投じたい。自分や地域社会、日本にとってよりよい候補者は誰なのか。よりよい社会を築いていくために、近い将来大人となる現在の子ども達に「選択・判断」する力を育成していくことは社会科の重要な使命と言っていいだろう。自律的に「選択・判断」を積み重ねていくことができる力、それが社会を運営する力となる。

小学校の社会科授業で「社会へのかかわり方」を「選択・判断」させる場合、取り上げるべき事象はやはり身の回りに起きている身近なものがいいだろう。社会的な事象の見方・考え方を働かせ、事象そのものの特色や意味を捉えていく学習を発達段階に即して計画的に配列していく工夫が必要である。

そこで、附属小学校社会科研究部では、「子どもが社会的事象に関心をもち、その意味を捉え、よりよい社会の在り方について考えながら、社会の一員として他者とともに生きようとする態度を育成していく学習」を成立させるべく授業の開発を進めることとした。社会科学習において、子どもが「今とこれまでのことを学び、捉えてきたことを通して、未来について考えることができるようにしていくこと」を目指し、研究テーマを「社会へのかかわり方を選択・判断できる子どもの育成」とすることとした。

3. 授業実践の概要

3.1 授業テーマ

「日本の米作り～将来について考える～」

3.2 授業テーマ設定の理由

「選択・判断」させるための題材を、今回は「輸入についてどう思うか」と設定した。その意図は以下の通りである。

- 日本の米作りは、日本農業の根幹である。様々な工夫や努力が行われ、今に至っている。
- 生産量と消費量のバランスを取るため、生産調整等を行う反面、米を玄米ベースではあるが約80万トン輸入している。
- 日本農業は、後継者不足等の様々な問題を抱えている。

本授業で育成の対象としている小学5年生にとっては、日本の米作りという学習テーマは、自らの生活経験からも様々なことを考えることができるよい素材であると考えられる。昨今のニュース報道で伝えられる輸入品に対するイメージはあまりよいものとは言えず、輸入について否定的に捉えている子どもも実際の教室では相当数いる。グローバル化が著しい現代社会において、輸入を全くしない、という事は考えられず、実際、日本社会が伝統的に作ってきた米

でさえ、輸入をすることが避けられない現実がある。そこで、「輸入する（していく）」ことにどう向き合っていくのか、本単元を通して子どもと一緒に考察をしていくこととした。

3.3 単元の構造

単元構成で述べた理念を具体化したものが下の表である。

第1時	○単元の学習問題を設定する。 (選択・判断するテーマを決める)	どうして、寒い地方で米の生産量が多いのだろうか？
第2時	○品種改良についてさぐる。	◎その土地の気候にあった品種を開発している。(おいしさ・病気等)
第3時	○自然環境の秘密をさぐる。	◎米を栽培するのに適している自然条件がある。(土地, 水, 気候)
第4時	○米作り農家の秘密をさぐる。	◎様々な作業を行っている。その作業では、様々な人の協力がある。
第5時	※機械化は農家にとって・・・ →自然発生的に出てきた問題	◎機械化することで、作業時間的には短くなってきている。その分経済的負担が大きい。それを解消するための取り組みも行われている。
第6時	○学習問題の答えは？	→学習問題に対する答えを一人一人がもつ。
第7時	○米作り農家の抱える「今」 →後継者不足, 生産調整	◎米作りに携わる人の数が減ってきている。特に若者の数が減ってきている。
第8時	○田の働きと現状	◎田には、様々な働きがある。一方で、使われなくなり放置されている田もある。
第9時	○輸入していることについてどう思う？	→輸入していることについてどう思うのか、一人一人が、学習したことを基に考えをもつ。

第1時では、単元の学習問題を設定する。具体的には「どうして、寒い地方で米の生産量が多いのだろうか？」と子どもに問い、答えを予想させる。後々「選択・判断」するテーマが「米作りと輸入」であることはここでは伏せておく。

第2時では、品種改良について、子ども自身で探っていく時間を用意する。「その土地の気候に合った品種を開発している」事実に出会わせ、おいしさ、病気等に対する農家のこだわりをつかませる。

第3時では、自然環境の秘密をさぐる。土地、水、気候という観点から、「米を栽培するのに

適した自然条件」があることに気づかせる。

第4時では、米作り農家の秘密をさぐる。農家は様々な作業をしており、人々はそれぞれ協力しながら米作りに励んでいることをつかませる。

第5時では、機械化について伝える。機械化することで、作業時間が短くなっている反面、機械を導入する費用がかさみ、経済的負担が大きくなっている現実を伝える。それを解消するための取組が行われているが、負担が急に減ることがないことを知らせる。

第6時では、学習問題の答えを探求させる。一人ひとりの子どもが自分なりの答えを創作することを目指す。

第7時では、米作り農家の抱える問題を考えさせる。後継者不足の農家が後を絶たないこと、生産調整による米作りの制限をつかませる。

第8時では、田の働きと現状を考えさせる。田にはさまざまな働きがあり、日本の国土に欠かせない機能を果たしていること、使われなくなり放置されている田が増えていることをつかませる。

第9時では、日本政府が米を輸入している現実を知らせ、輸入についてどう考えるか、意見の表明をさせる。その際、一人ひとりが積み上げてきた学習の成果を使って自らの考えを作り出すように導くこととする。

3.4 社会的事象の見方・考え方の設定

それぞれの時間において、社会的事象の見方・考え方をどのように働かせるべきか。学習指導要領解説では、以下のような説明が施されている。

【位置や空間的な広がり】

地理的位置、分布、地形、環境、気候、範囲、地域、自然条件、社会的条件、土地利用 等

【時期や時間の経過】

時代、起源、由来、背景、変化、発展、継承、維持、向上、計画、持続可能性 等

【事象や人々の相互関係】

工夫、努力、願い、業績、働き、つながり、関わり、仕組み、協力、連携、対策、事業、役割、多様性と共生 等

上の記述をもとに、「比較・分類」することや「総合」すること、また「地域の人々や国民の生活と関連付け」たりすることとした。開発した単元においては、以下のように時間ごとに整理してそれぞれの見方・考え方を配置することとした。

第1時	・日本地図にまとめる作業を通して、米の生産量の多いところの特徴をつかむ (位置や空間的な広がり) ・米の原産地と生産量の多いところの気候の特徴の違い (位置や空間的な広がり)
第2時	・品種改良にかける人々の思いや願い (事象や人々の相互関係) ・品種改良がどのように行われてきたのか (時期や時間の経過)
第3時	・田が多く広がっているところは (位置や空間的な広がり)
第4時	・米作り農家の仕事は (事象や人々の相互関係, 時期や時間の経過, 位置や空間的な広がり)
第5時	・機械化によって得られたものは (位置や空間的な広がり, 事象や人々の相互関係)
第6時	
第7時	・米作り農家の現状は (時期や時間の経過)
第8時	・田の働きと現状 (位置や空間的な広がり, 事象や人々の相互関係)

3.5 授業における「選択・判断」場面の設定

本単元においては、選択・判断するテーマとして「輸入していることについてどう思う？」と設定した。このテーマを設定するにあたり、理由としては以下のことを考えるに至った。

- 輸入をすること自体に関して「よいこと・悪いこと」という二側面から判断することは適当ではないと考えた。二つの価値のみに基づき判断することは、グローバル化している現代社会を鑑みて、小学生に価値判断させるテーマとしては適当ではないという判断を行った。
- 後継者不足や耕作放棄地の増加といったことや生産調整といった政策面から、小学生として輸入しているという事実をより客観的に判断できるのではないかと考えた。

以上の理由により、第9時において、「輸入していることについてどう思う？」と子どもに投げかけることとした。

4. 指導の実際

4.1 第1時における子どもとのやり取り

米の生産量の多い地域と米の原産国との位置的ギャップから、「寒い地域に米の生産量が多い地域が沢山あるのはなぜか」といった疑問を持たせることができた。また、玄米ベースではあるが日本政府は約80万トンを超えて海外から輸入しており、全国で一番米を生産している新潟県の生産量よりも、20万トンも輸入量が多いという事実から「どうして外国から輸入しているのか？」という疑問を引き出すことができた。その際、外国産の米は自分たちの身近な小売店で

は売られていないという事実や、米は日本のものであるというイメージから「輸入しなくてもいいのに!!」といった言葉が子どもたちから沢山発せられたため、「輸入していることについてどう思うか?」と問うた。その上で、授業で色々なことを調べながら、一人ひとりが自分なりの考えを持つことができるようになろう、と子どもの発言を促し、テーマ設定を行った。「寒いところで」の方の学習問題設定は上手くいったが、「輸入」については、時間設定のまずさもあり、強引な面が少なからず生じることもあった。

【実際の子どものやり取り】

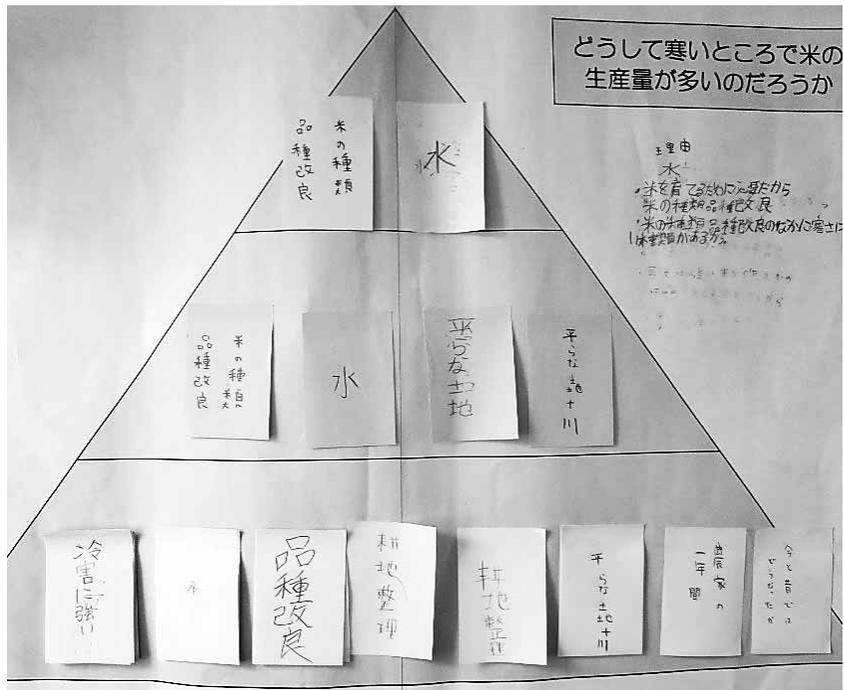
発言	教師の見取りと指導の意図
<p>T : 近くのスーパーには、このようなところのお米が来ていたけれど、じゃあどこが米の生産が多いと思う。</p> <p>C1: 宮崎県だと思います。</p> <p>C2: 野菜の生産も多いし、スーパーでもたくさん売っています。</p> <p>C3: 家の近くでも、米をつくっている田がたくさんあります。</p> <p>C4: わざわざ宮崎まで運んできていますので、遠いところかもしれません。</p> <p>C5: 北海道や新潟県だと思います。お店で見たからです。</p> <p>C6: 本で見たことあるよ。</p>	<p>以上のように、スーパー調べをしてきたことを基に予想をする姿が見られた。その中には、わざわざ遠いところから運ばれてくるといった視点から考える姿が見られた。</p>
<p>T : 生産量の多いところを、日本地図にまとめたけれど、どこが多いといえるかな?</p> <p>C1: ぼくは、北海道や東北地方が多いと思います。</p> <p>C2: ぼくは、北の方だと思います。</p> <p>C3: わたしは北日本かな?と思います。</p> <p>C4: だったら、東日本じゃない。東日本大震災という言い方もあったよ。</p> <p>C5: わたしは、寒いところだと思います。</p> <p>C6: 宮崎よりも寒いところだよ。</p> <p>C7: 特に冬が寒かったよ。</p>	<p>米の生産量が多いところについて説明をさせる際、様々な視点から説明できることを称賛することで、見方考え方を広げることにつとめた。</p>
<p>T : じゃあ、米が元々育っていたところはどこだと思う。</p> <p>C1: 寒いところでよく育つんだろうね。</p> <p>C2: あたたかいところでは無理なんじゃないかな。 (米の原産国の雨温図を提示して・・・)</p> <p>C1: 宮崎みたいにあたたかいところだよ。</p> <p>C2: 新潟県とは違うよ。</p> <p>C3: 寒いところではないんじゃない。</p>	<p>米の原産国の雨温図を提示し、米の生産量の多いところの雨温図と比較させることで、ずれを生じさせ、学習問題を設定することができた。</p>
<p>T : 80万トンという量があるけれど、何の量か分かる。 実は、輸入している量なんだけれど・・・。</p> <p>C1: 新潟県の生産量よりも多い。</p> <p>C2: ちょっと多いような気がする。</p> <p>C3: 米は日本の主食だから、輸入していないと思った。</p> <p>C4: お店で売られているのを見なかったけれど。</p>	<p>米を輸入しているという事実から、輸入に対する意識をもたせ、テーマ設定につなげた。</p>

【板書の事実】



4.2 第6時における子どもとのやり取り

「どうして寒い地方が、米の生産量が多いのだろう」という答えを導くために、これまでの学習を通して、大切だと思われるものを「黄」のふせんに書き出させるようにした。その後、グループで書いたものを紹介し合い、類型化させることにした。



その中で、大切であると思われるものをまとめながら、「青」の付箋紙にまとめるようにした。さらに、青の付箋紙に書かれたことをまとめさせていくことで、学習問題の答えになるものを導く手法をとった。

右上に事例として示した班の記述を見ると、「品種改良」と「水」が大切であることを導いたことが分かる。「寒さや病気につよい」品種を生み出してきた人々の努力という面に目を向けるとともに、「雪解け水」や「大きな川」といった、豊富な水などの自然環境に目を向けたようだった。ここから、本単元で設定した学習問題に対する答えを子どもなりに文章化することができた。

4.3 第7時における子どもとのやり取り

第7時では、「輸入していることについてどう思うのか」を判断する材料として、米作り農家の抱えている問題点について学習を行った。扱った資料は以下の3つであり、子どもの反応は大きいものだった。

- 米作り農家の数
- 農業で働く人の数の変化
- 生産量と消費量の変化

米作り農家の数のグラフからは、年々生産者が減少しており、50年間で1/5になっていることが分かるようにした。また、農業で働く人の数のグラフからは、こちらも年々人数が減少していること、若い人や働き盛りの人の数が特に減ってきていることが分かるものを示した。これらの事実から、どのようなことが予想されるかを子どもに考えさせることとした。農家の数がさらに減り、米の生産量も減ってしまうこと、また輸入に頼らざるを得なくなることを考える子どももおり、さらに機械化されていくことを考える子も生まれた。

生産量が減るといった意見が出たことから、生産量と消費量の変化のグラフを教師から提示することとした。生産量が年々減少していることが分かるとともに、消費量も減ってきている事実を使い、さらに生産量の増減の激しいところから、天候に左右されてしまうことや政府による施策により、米を作りたくても作れない現状があることをつかませることができた。

【実際の子どもとのやり取り】

- T : 米作り農家の数はどうなっていると思う？
- C : 口々に・・・増えている！！、減っている！！変わらない！！
(変化の様子を提示すると)
- C1 : 年々減ってきています。
- C2 : 減り方が急なところと緩やかなところがあります。
- C3 : 数は、500万から100万に減っています。
- C4 : 400万も減っているよ。
- C5 : じゃあ1/5になったんだね。
- T : 農業に携わる人の数を見てみるとどうなっていると思う？
- C : 口々に・・・減っている！！ (ほぼ全員)
(変化の様子を提示すると)
- C1 : 農業をする人も年々減ってきています。
- C2 : 60才以上の人の数はほとんど変化がありません。
- C3 : 30才以下のところは年々減ってきています。
- C4 : その間のところも年々減ってきています。
- T : じゃあ、どういったことが考えられるかな？
- C1 : 農家の数はますます減っていくと思います。
- C2 : お年寄りばかりが農家をしていると思います。
- C3 : 米の生産量が減ってくると思います。
- C4 : 輸入する量が増えてくるのではないかと思います。
- C5 : たぶん、機械化(ロボット)されてくるのではないかと思います。

(生産量と消費量のグラフを提示し、生産調整等の事実を知った後)

T : 米はとれなくなってきたのかな？

C1 : 生産調整をしているから、とれなくなったのではないと思います。

C2 : 作りたくても作れない農家もいると思います。

C3 : 米を食べる量が減ってきているので、しょうがないと思います。

C4 : 田はあるけど、米を作れなかったら、農業をする人も減ってくるはず。

C5 : だから今は、農業をする人も減ってきているのかなと思います。

C6 : 作っていないところで作るようにすれば、輸入をしなくてもいいのではないかと思います。

T : じゃあこの1時間みんなで話し合ったことを基にして、今の日本の米作り農家の現状についてまとめてみよう。

【板書の事実】



5. 実践を終えた上での考察

5.1 単元構成及び「選択・判断」場面の位置づけについて

単元を貫く学習問題とともに、導入段階で「選択・判断」する場面を設置したことによって、1時間1時間の学習する意味をこれまで以上に子どもが持つことができたと考える。1時間のまとめの中で、今日の学習を踏まえるとどう思う？と投げかけ考えさせることで、各時間で子どもの様子に変容が見られた。子どもも「～だったら…」「今日の学習とこの間の学習を…」とつぶやきながら真剣にまとめていく姿が見られた。

一人一人の考え(思考内容)の「見取り」を行うために、今回は「新聞」を作ることにした。学習問題とテーマについてどちらか一つについて新聞にまとめさせるようにした。次ページに示したのは、子どもが作成した新聞によるまとめである。

輸入についてどう思う？

日本は、輸入を 80万ト もしているそうです。

日本の輸入について私は……
 私は、日本の輸入について、お米は作らないといけないと思います。
 外国のお米を輸入するのではなく、作らないと日本のお米がすくなくなってしまうからです。(作る量)

米づくり農家の数は？… 1/2の数に減少
 1965年 → 約500万
 2015年 → 約100万 年々減っています。

◎農家の人は？◎
 農家をする人は半分が60才以上の人。
 ※若い人、働きざかりの人が少なくなっている。

農家がへる。米がとれなくなっただけ
 60才以上ばかりに
 ↳若者がへる。米がとれすぎるので生産調整をしてい
 米の生産量がへる

輸入がふえる ※田はあるけど作れない

～まとめ～
 お米は、たりのぐらいつくれる。
 ↓
 生産調整
 農家の収入がへる
 米づくりをする人がへる
 ※若者が少なく

耕作放棄地 424000ha

何もしていない農地

外国との関係をよく
 することでもある！の瓜す

田のやく目録 (7つ)

- ・洪水を防ぐ
- ・土しゃすいがいを防ぐ
- ・水をきれいにする
- ・地下水をつくる
- ・気温の調節
- ・生き物
- ・人が集まる

まとめ(輸) 外国のお米を買うのはいいけど、耕作放棄地が富山県くらい、自分たちでお米を作った方がいい!!!

長い(5) 長い(2)

5.2 社会的事象の見方・考え方をいかに働かせるのか、について

1時間ごとに重要となってくる「見方・考え方」を予め整理しておくことで、資料を準備する際の視点となった。また、どう発問すればよいかといった発問構成にも大きく役立てることができた。まとめを行わせる際にも、学習してきたことを意識させることで、一人一人が、その子なりに培った見方考え方が発揮されるまとめとなった。このように授業を作る段階で見方・考え方を明確に設定しておくことが実践上有意義であることが自覚できた。